

資料1-1 ユニークな里山保全活動に関する調査表 (2006年1月)

1. 会の名称	NPO法人 信越トレイルクラブ (聞き取り相手：事務局の大西さん)
2. 構成メンバー（会員数と会員の属性）（平成17年12月現在）	・会員数 153（うち正会員63名，賛助会員90） ・役員 24名（うち事務局スタッフ 5名） ・会員は50～60代が多く，20代が少ない．30代の男性が増えている． ・会員の居住地の特徴（県内74（うち飯山市29），県外59（うち東京26））
3. 連絡先（事務局）	NPO法人 信越トレイルクラブ事務局 〒389-2601 長野県飯山市なべくら高原柄山 なべくら高原・森の家内 TEL 0269-69-2888, FAX 0269-69-2288 URL http://www.iiyama-catv.ne.jp/~s-trail/ E-mail:s-trail@iiyama-catv.ne.jp
4. 活動資金源	・会費 約50万 ・各種助成金 長野県（雇用創出事業 飯山市が受託） 約500万 国土交通省整備局（調査事業） 約500万 国土交通省運輸局（調査事業） 約150万 長野県緑の募金 20万 国土緑化推進機構 80万 コンサベーションアライアンスジャパン（民間基金） 20万
5. 活動開始年月とおおよその活動の頻度	・NPO法人格の取得：H16年1月 ・トレイル整備 1回／週（6月～11月） ・イベント 1～2回／月（12月を除く毎月）
6. 主な活動の場所（拠点）	・関田山脈とその周辺の里山（長野，新潟両県） ・東京，関西，中京地域（H17年は東京3回，中京1回）でも活動をPR
7. 活動の内容（対象，種別，経緯や変遷など）	(1) 経緯や変遷 H12年：国土交通省「北陸地域の地域づくり戦略」事業の一環として信越トレッキング委員会が設立される． H13年：地元関係者を中心に関田山脈歩くルート設置推進連絡会が発足． H15年：委員会と連絡会の流れを継承した特定非営利活動法人を立ち上げる． H16年：長野県よりNPO法人の認証を受ける．

(2) 内容

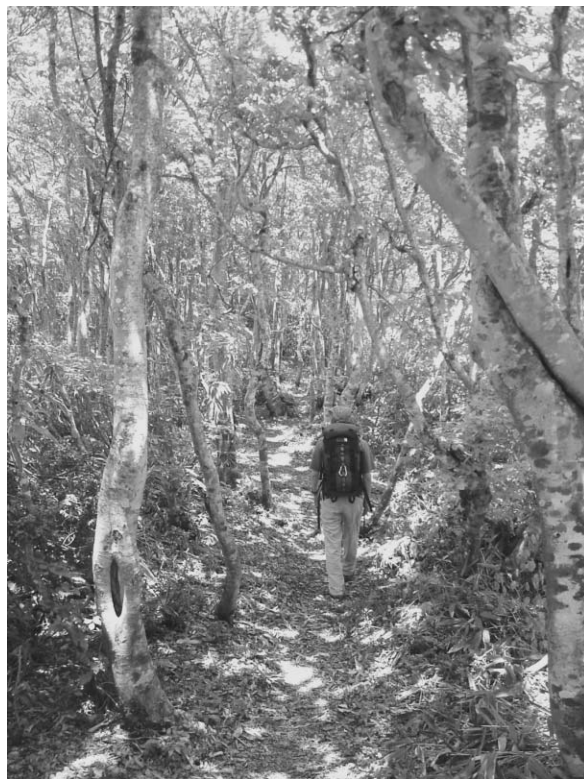
〈目的〉(資料より抜粋)

この法人は、新潟・長野の県境、関田山脈の歴史ある旧道・古道の復元と、各市町村の休憩・避難施設の管理活用、ロングトレイル(長距離自然道)としての整備を通して、両県の地域連携を図り、自然・歴史といった地域資源を再認識し、自然の保全と持続的利用を図り、自然を求めてトレイルを訪れる人々との交流を通じて、地域の活性化、観光振興に寄与する。また、里山である関田山脈の豊かな自然から、人間と自然とが共存する里山の機能を理解するとともに新たな里山のあり方を考え、環境問題への意識を啓発することを目的とする。

〈主な事業内容〉

- ・トレイル(歩道)の整備・維持管理事業
- ・地域の交流・活性化に関する事業
- ・自然保護に係る啓発・レンジャー活動
- ・ホームページ、パンフ等による入山時のルール、マナー理念の啓発や地域の観光PR
- ・一帯の自然環境に関する調査・保全活動
- ・自然観察指導員、ガイド等の派遣事業
- ・自然観察会、トレッキングツアー、シンポジウム等のイベント事業
- ・各地域、管理団体、地権者、森林ボランティア団体等との連携・協力体制の確立
- ・インタープリター・指導員の人材育成
- ・森林セラピーの場としての利用

(3) 活動の様子(写真)



写真(左)設置したオリジナル道標、(右)整備した信越トレイル(斑尾山頂付近)

8. 活動の特色や特徴、自慢にしているところ、モットーなど

- ・長野県と新潟県にまたがって活動していること。
- ・国内では珍しいロングトレイルを活動の場としていること。
- ・林野庁と協定を結び、国有林内で活動していること。
- ・自然環境の保全を重視したトレイルの利用をめざしていること。また、トレイル利用前から、理念、ガイドライン、ルールを定めていること。
- ・標語「真のエコツーリズムを目指して」、「自然と人間が共存する新たなエコツーリズム」

9. そもそもの活動の動機は？

- ・過疎のすすむ豪雪地の地域づくり。
- ・県境を超えた地域づくり。

10. 将来への希望や目標

- ・信越トレイル利用者の長期滞在の増加。特にグリーンシーズン観光の核として。
- ・地域の自然環境の保全を続けながら、利用と共存させていくこと。
- ・信越トレイルが地域の人たちにとっても誇りの持てる財産となること。

11. 悩みや課題などがもしあれば…

- ・活動に対しての地域の方の理解や認識は高まってきたが、まだ関心は薄く、参加も少ないのが現状。
- ・信越トレイルの存在は地元観光産業に少なからず貢献はしているものの、積極的に活用してもらえそうな気運はまだ高まっていない。
- ・トレイルの整備等のボランティア活動の継続が課題。
- ・信越トレイルクラブとしては長いスパンにたって活動をしているが、地元はまだ短期的に考えている。
- ・自立するためにも、定期的な収入、予算獲得が課題。

12. 調査者からの感想、コメント

小笠原や屋久島、白神山地など日本代表する自然環境を有する地域がエコツーリズムの先進地として知られている。しかし、エコツーリズムはこのような自然がなければ成り立たないわけではない。ツーリズムの対象となる自然を自らが掘り起こせばよい。その意味において、信越トレイルクラブは何の変哲もない里山をその活動の舞台としたエコツーリズムを開始した点において、これからのエコツーリズムの形を変えていく活動ではないだろうか。

またトレイルの運用を開始するにあたっては、関係者間でのトレイル利用についての理念の共有、自然環境調査や利用状況・交通量調査の実施、利用にあたっての自然環境の保全を核としたガイドライン、ルールの策定、などを実施している点も特筆すべき活動だと考えられる。また、運用開始後も自然環境や利用状況等を定期的にモニタリングしていくこととなっている。トレイルを運用開始する前から自然環境の状況を把握し、モニタリングを継続していくということは、今後、利用者の増加に伴う自然環境の悪化などを早い段階から捉えることができ、すぐに悪化を防ぐ対策をとることができるということにつながる。この点に置いても新たなエコツーリズムの可能性を感じさせる。

13. 参考資料

- ・特非営利活動法人 信越トレイルクラブ 概要（内部資料）
- ・信越トレイルクラブパンフレット

調査担当者（浜田 崇）

資料 1 - 2 ユニークな里山保全活動に関する調査表 (2006年 1月現在)

1. 会の名称

染屋の森の会

川上美保子さんにヒアリング

2. 構成メンバー (会員数と会員の属性)

会員数 20名 (内 地元の住民17名, 男性6名, 女性14名)

会員の属性 主婦, 元教員など

3. 連絡先 (事務局)

上田市古里2117

4. 活動開始年月とおおよその活動の頻度

活動開始年 1998年, 活動の頻度 月1回

5. 主な活動の場所 (拠点) と活動費

上田市の段丘崖の雑木林とその周辺

上田市中央公民館 (勉強会)

活動資金と資金源 会費年間1名3000円, 他に科学研究助成金の活用等

(2) 内容

- ①段丘崖の雑木林調査 緑地の役割の重要性を市民に知ってもらうため, 樹木測定を行いCO₂吸収や, 林内と林外との気温比較のためのデータを収集を行っている. また, ドングリを蒔き, 植樹をしたりして, 雑木林の復元にも努めている.
- ②アカマツ林の調査 カミキリムシにより枯死した林の植生調査を継続して行い, 林のより良い効果的な保全に向けての取組みをしている.
- ③多くの地域の人たちが身近な自然に親しめるように, 冊子「塩田平の花」を作成し, 塩田平地区の児童900人にも贈呈した.

(3) 活動の様子 (写真)



「親子と一緒に樹木測定」



「塩田平のため池斜面植生調査」

7. 活動の特色や特徴、自慢しているところ、モットーなど

身近な自然の良さを楽しみながら学び、多くの人にその価値を知らせて保全を働きかけていくこと。実験林について

実験林に植栽されたケヤキ、クヌギなどは20年が経過し周囲の森とともに緑地を形成している。森が環境影響の緩和を果たしていることを実証し、緑地の効果を市民に理解してもらうため、実験林に気温測定器を設置し森の中の気温を測定し、街の気温と比較している。長野県環境保全研究所にも活動支援をお願いし、気象データの提供も行っている。

8. そのものの活動の動機は？

自然講座を受けて、世界の自然、上田の自然を学んだあと、自然と人間のあり方についてもっと知りたいという願いがあって会が発足した。身近な緑地や森の大切なことを知ることで、緑地保全の願いを持つようになった。

9. 将来への希望や目標

自然の仕組みを学び、緑地保全に貢献したい。自然の仕組みを広く伝え、行政にも自然を大切にしたい課題解決をしてもらいたい。

10. 悩みや課題などがもしあれば…

会員の拡大がなかなかできない。

11. 調査者からの感想、コメント

環境保全に向けた取り組みを、市民と共に実践している。身近な自然に親しむための資料として、カラー刷りの冊子「塩田平の花」を編集され、広く配布するなど具体的な活動をされているのは特筆される。

今後、調査した内容や調査データの活用、地球温暖化防止活動の推進、行政との連携など、活動を深めてほしい。

調査担当者（大塚孝一）

資料 1 - 3 ユニークな里山保全活動に関する調査表 (2006年 1月現在)

<p>1. 会の名称ととりあげる活動</p> <p style="text-align: center;">森倶楽部21による長峰山の活動</p> <p style="text-align: right;">(森倶楽部21代表) 永田千恵子さんにヒアリング</p>
<p>2. 構成メンバー (会員数と会員の属性)</p> <p>会員40名 (内17名女性, 23名男性), 年齢は30代~60代 (地元の旧明科町の会員4名) 林業関係者3名, 行政関係者4名, ほかは会社員, 主婦など</p>
<p>3. 連絡先</p> <p>〒399-0033 長野県松本市笹賀2497-3 TEL&FAX 0263-58-0360</p>
<p>4. 活動開始年月とおおよその活動の頻度</p> <p>2000年4月から (会の発足は1998年5月) 毎月第4日曜日 (現地での自然観察, 調査など), 月1回公民館で例会など</p>
<p>5. 主な活動の場所 (拠点) と活動費</p> <p>・安曇野市 (旧明科町) 長峰山 (天平の森周辺) (ほかに大町市大黒町の森 (約2haヒノキの間伐) や塩尻市みどり湖の森 (1ha未満カラマツの間伐) における活動も行なっている)</p> <p>活動費としては会費 1人3000円/年. 最初に頃に, 国土緑化推進機構からボランティア向けの助成をうける. 講師謝金について町からの補助, フォーラムの開催に長野県緑の基金による助成を得ている. 活動に使う, チェーンソーなどの道具等は基本的には各自が自前で調達.</p>
<p>6. 活動の内容 (対象, 種別, 経緯や変遷など)</p> <p>(1) 経緯や変遷</p> <p>1998年 大町市の荒山林業さんに指導をうけて, 森の整備を体験</p> <p>1999年 活動の場を明科町にみつける (長峰山との出会い) 明科町の「未来にひきつぐ郷土の森整備事業」に協力</p> <p>2000年 春から現地での活動を開始 (自然観察, 調査, 矢ノ沢地区の住民との交流などがはじまる) 浜氏の指導により, 長峰山全体でのチョウの観察調査はじまる</p> <p>2001年 国庫補助事業「森林空間総合整備事業」のなかで動植物調査を実施県と町による「絆の森整備事業」に協力</p> <p>2002年 町と共催の講習会のなかで「長峰山のチョウ類の分布からみた森づくり」が提言される. また町と県地方事務所により開催された長峰山での育樹祭をきっかけに「チョウの森づくり」が始められる</p> <p>2004年~2005年 「絆の森整備事業」のなかで間伐除伐, 遊歩道整備などを実施.</p> <p>2005年3月 町と共催で「天平の森フォーラム」を開催. 7月「天平の森フォーラムⅡ (実技編)」を開催</p>

(2) 活動の内容

〈自然観察と調査〉

天平の森周辺をフィールドとして、多くの講師を招きながら、動物、植物、地形地質などの自然観察と調査を実施。とくに浜氏の指導をうけて、チョウの観察に力を入れ継続調査をしている。伐採後に自然に生えてくる植物など、整備後の変化についても記録をとっている。

また、活動初年度から、地元矢ノ沢地区の住民と交流を重ね、地元の年配の方から、かつての暮らしの様子や自然環境などについて学んでいる。

〈森林整備〉

放置され、こみ入った一部の林について除伐間伐を実施。また、町からの依頼を受けて一部の間伐施業と遊歩道整備を実施。チョウの生息環境を考慮して森林整備を行なう「チョウの森」の整備を実施。

〈情報の蓄積と、情報の発信〉

- ・月1回、会報を発行
- ・年1回、一年間の活動記録と関係者の所感を載せた記録誌「森に学ぶ」を発行
- ・調査結果をもとに、整備のあり方など、町や県に提言
- ・町と共催で「天平の森」フォーラムを開催し、会員、林業関係者、行政関係者、一般市民の参加者と、里山の魅力とこれからの問題などについて情報交換。
- ・公民館の体験講座などで長峰山での活動の内容を紹介

(3)活動の様子（写真）



地元矢ノ沢地区の住民の方にかつての暮らしの様子や地区の歴史を聞く



チョウの森でチョウの道を整備中

7. 活動の特色や特徴、自慢にしているところ、モットーなど

- ・チョウを指標として、森と生き物との関係やその変化をとらえようとしていること
- ・地元の方々と交流し、かつての里山と人との関わりを学び、それをこれからの里山の環境保全に生かそうとしているところ
- ・いろいろな分野の専門家から協力を得て、皆で考えながら活動してきたこと
- ・地元明科町（現在安曇野市）や県と関係をもち、言うべきことはしっかり言いながら、協力し連携しながら活動してきたこと

8. そのものの活動の動機は？

1998年に地球温暖化問題に関連し、映画「草刈十字軍」の自主上映会があったのがきっかけで、森林の問題に関心をもったことがはじまり。森林施業のプロの指導を受けながら、実際に現場を体験するなかで、自分たちの活動のためのフィールドが欲しくなった。そこで出会ったのが長峰山だった。とにかく、何か継続してやれる活動がしたかった。

9. 将来への希望や目標

- ・里山の自然から得てきた暮らしの知恵と、人のかかわりの中で形作られてきた自然を失ってしまうことの無いように、調査を継続して保全策を考えていきたい。また、そのようなことを学び、考え、実践する「里山自然学校」を企画したい。

10. 悩みや課題などがもしあれば…

- ・まだ里山の自然や里山の保全に関心をもっているのは一部の人たちだけなので、とくに街に住む地元の人たちに、もっと里山に関心をもってもらいたい
- ・たくさんの様々な人たちに、積極的に里山の手入れに汗を流してほしいけれど、まだまだそうはなりそうにない
- ・長峰山の天平の森周辺については、ただの観光地という見方しかされないことが多い。市や関係する人たちには、この地域を将来どうしていけばいいのかということをもっと考えて欲しい。

11. 調査者からの感想、コメント

まずチョウという生き物に注目し、それを指標とした里山の手入れをすすめているのは里山の活動として、とてもユニークだと思う。多くの専門家や地元の人たちの協力を得ながら調査を継続し、行政も交えて現場で一緒に考え、整備に汗を流し、5年の歳月を経てそれらの成果が具体的に目に見える形になってきた点がすばらしいと思う。

チョウに着目したことにより、手を入れた効果が具体的な数字となって検証できつつあり、また、森林だけを問題にするのではなく、里山が人の生活とともに多様な環境が形成されていた場であったということのを大事にしている点も重要だと思う。その視点は、場所ごとに手入れの方針を変え、手入れの効果を検証するための調査にも生かされている。

当初は素人集団による活動だったという話でしたが、今では経験に裏打ちされた里山に関する専門家集団になりつつあると思われます。

参考資料：会報、記録誌「森に学ぶ」、入会案内パンフレットほか

調査担当者（富樫 均）

資料 1 - 4 ユニークな里山保全活動に関する調査表 (2006年 1月現在)

<p>1. 会の名称ととりあげる活動</p> <p style="text-align: center;">小泉山体験の森創造委員会による活動</p> <p style="text-align: center;">(委員長) 白鳥恵朗さん, (副委員長) 永由桃介さん (事務局) 金子 強 課長, 樋口尚宏 係長 にヒアリング</p>
<p>2. 構成メンバー (会員数と会員の属性)</p> <p>会員80名 (男性), 年齢は主に60代~70代 (在宅元気組) すべて小泉山周辺に在住の人たち, 土地所有者や財産区の役員の人もある</p>
<p>3. 連絡先 (事務局)</p> <p>茅野市教育委員会 学習企画課内 TEL 0266-72-2101 (内612) FAX 0266-73-9843</p>
<p>4. 活動開始年月とおおよその活動の頻度</p> <p>2001年 7月~ 月数回 打ち合わせ, 調査, 整備活動, 研修会, 催し, 編集会議など</p>
<p>5. 主な活動の場所 (拠点) と活動費</p> <p>・茅野市小泉山 (面積約100ha, 周辺集落と山頂との比高は約150m) 市役所 (事務局), 各部会が活動する公民館分館 2002年~2004年にかけて, 整備費やパンフレット作成費などとして市が予算化 (3年で総額約1400万円). それ以降2005年度も市が150万を予算化. ライオンズクラブなどからの寄付金 (計約200万円) もある.</p>
<p>6. 活動の内容 (対象, 種別, 経緯や変遷など)</p> <p>(1) 経緯や変遷</p> <p>1996年 第三次茅野市総合計画において公民協働の「パートナーシップですすめるまちづくり」の方針が理念化される</p> <p>2001年 第三次茅野市総合計画「後期基本計画」において, 協働活動のなかから行政課題として「福祉, 環境, 教育」の3つの柱が選ばれ, その「教育」面からのひとつのアプローチとして, 小泉山の活用に目が向けられる, 在宅元気組の人たちが中心となり, 委員会が組織され, 小泉山に関する調査が開始される</p> <p>2002年 5つのルート (登山道) の整備開始, 除間伐4箇所, 駐車場整備, 看板設置と河川敷の整備</p> <p>2003年 4つのルートの整備. 除間伐3箇所. 駐車場整備, 看板設置, 河川敷整備, 植栽, 植物ハンドブックやパンフレットなどの刊行</p> <p>2004年 2ルート遊歩道整備, 川遊び場整備, 看板設置, パンフレット改訂, 史跡・由来調査報告書の作成</p> <p>2005年 研修会や学習会などの開催, 小泉山史跡名勝見所ハンドブックの発行 「体験の森創造委員会活動報告書」の発行 (2006年 3月予定)</p>

(2) 活動の内容

- ・小泉山を中心に、山をとりまく周辺集落から山頂に向かう9つの登山ルートを整備，それに伴う除伐や間伐も実施
- ・山の稜線近くなどに残る史跡や名所の由来などについて調査や発掘を実施
- ・地区や学校，専門の調査担当などからなる17の部会を組織し，それぞれが分担して，小泉山の調査や，林内の手入れ，看板設置，植物の名札つけ，草刈，ハンドブックやパンフレットの作成，活動報告書の編集などをおこなっている（一部のハードな整備工事については市から業者に委託）
- ・子どもたちの登山や体験学習に協力，山での遊びの伝承
- ・子どもたちの意見を取り入れた整備のための計画づくり
- ・元旦登山，山開き，自然観察会，史跡めぐりなどの行事の開催
- ・各分野の講師を招いての学習会や研修会の開催

(3) 活動の様子（写真は体験の森創造委員会提供）



小泉山の山開きの様子
（毎年6月～7月に開催）



金毘羅様のところで木登り体験

7. 活動の特色や特徴、自慢にしているところ、モットーなど

- ・小泉山を中心にして、周辺地区の住民と行政と学校がひとつになって活動していること
- ・学校の先生も熱心に協力してくれ、整備計画に子どもたちからの提言を取り入れ、子どもたちと一緒に山づくりをしてきたこと
- ・明治以前から地区毎の入会地となっていた歴史があり、その後も厳しい管理がなされてきた山だったが、活動を通して誰もが散策できる開かれた山になったこと
- ・活動を通じて地域の交流(山に隔てられた南北の地域や昔からの住民と新興住宅地の住民間で)や、年齢をこえた交流(大人と子ども)がはかられたこと

8. そのものの活動の動機は？

もともとは里山の整備ということは考えていなかった。学校が週5日制になるということもあり、子どもたちの教育のために地域ができることとして、小泉山の活用が考えられた。かつて小泉山で遊んだ地元の年配の人たちに集まってもらい、子どもの頃に遊んだ体験を話しあうなかで、活動をすすめていく気持ちが盛り上がった。

9. 将来への希望や目標

- ・体験の森の準備は一応整ったので、今後継続して大いに活用してほしい

10. 悩みや課題などがもしあれば…

- ・山で自然体験ができる準備はできたが、子どもたちだけで山に遊びに行くことが犯罪にまきこまれるなどの面で心配されるような社会環境にあることが残念
- ・親から子に山での自然体験が伝えられてほしいが、今の親の世代も自然体験が乏しく、あまり子どもを山につれていったりしない。経験をどう伝承してゆくかが問題
- ・山の整備と活用について将来につなげてゆく後継者の確保

11. 調査者からの感想、コメント

里山整備ということは当初念頭になかったが、活動が広がるなかで「結果として里山に多くの人が関心をもち、手入れがすすむことに結びついた」という点に魅力を感じた。荒廃した里山を、昔のように戻すということを一目的としたのではなく、まず「子どもたちの体験の場にしてみよう」という別の観点からの目的があり、その結果として変わりはた里山の現状に直面し、多くの人たちとともに汗をながして手入れをすることになったという過程に意味があると思う。このことは、これからの里山の環境保全をはかるためのヒントにもなると思われる。

また、伺った話にも出てきたが、「子どもたちのために」という共通の目的を地元住民がもつことができたおかげで、厳しい入会慣行の歴史をもち、その後も利用が制限されてきた山が、地域住民が共に自然体験し交流できる場として新しい価値を持つことになったという点にも大きな意味があると思う。

パートナーシップによるまちづくりの理念が、結果的に里山の保全と活用に結びついたというユニークでしかもわかりやすい事例といえるだろう。

12. 参考資料

小泉山体験の森創造委員会（2001～2005）活動報告及び提言書。

小泉山体験の森創造委員会編（2005）小泉山体験の森探訪。

渡邊敬逸（2005）「茅野市小泉山における林野の空間機能の変容」地域研究年報27, 75-87。ほか

調査担当者（富樫 均）

資料 1 - 5 ユニークな里山保全活動に関する調査表 (2006年3月現在)

1. 会の名称	野あそびの会 代表 松尾 研さんにヒアリング
2. 構成メンバー (会員数と会員の属性)	会員数 常時十数名程度, 活動拠点の「もなみ園」の利用者は多数 会員の属性 会社員, 公務員, 主婦など
3. 連絡先 (事務局)	代表: 松尾 研 〒395-1101下伊那郡喬木村阿島3731-1 TEL 0265-33-2208
4. 活動開始年月とおおよその活動の頻度	活動開始年 1994年 活動の頻度 随時
5. 主な活動の場所 (拠点) と活動費	喬木村富田紋網 (もんなみ) 地籍のもなみ園 活動費はとくになし
6. 活動の内容 (対象, 種別, 経緯や変遷など)	<p>(1) 経緯や変遷</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 喬木村富田紋網地籍で, 山奥の雑木林に囲まれた荒れ放題の棚田を利用して, 農村本来の生態系を復元することを目的に, 1994年の春に「野あそびの会」を結成した. ・ 活動拠点のこの地域を地籍名から「もなみ園」と名付けた. この名前はフランス語の友人を意味するモナミにも通じる. <p>(2) 内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 1994年早春に, 1枚の休耕田を掘って池を造りゲンゴロウなど農村の身近な生き物たちを呼び戻すことから始めた. 実際に, 夏に池が完成して, 秋にはゲンゴロウ・タイコウチ・コオイムシ・ミズカマキリ・イモリなど多くの生き物たちが戻ってきているのを確認している. ・ 池の完成後は棚田の土手の修復などの保全活動を行っている. ・ さらに, 1枚の田んぼでお米作り, 雑木林の下草刈り, 落ち葉かきなどを通して, 昔の農村のような人と自然とのつながりを体験できるような活動を行っている. ・ その後, 多くの人たちが訪れ, 農村の原風景である身近な生き物たちが生息できる空間として親しまれている. 特に子供たちを連れてきていっしょに楽しんでいる親たちが多い.

(3) 活動の様子（写真）

放棄されて荒れた棚田の1枚を掘り起こして池をつくる



完成した池でどれくらい水生昆虫がもどっているかを調査



7. 活動の特色や特徴、自慢にしているところ、モットーなど

- ・自然に農村の生態系が復元するように、身近な生き物の生息空間を整えるだけで、人間が生き物を持ち込まない。ただし、水草やメダカなど自然には入り込めない生物をできるだけ近くの水域から入れている。
- ・遊びながら、楽しみながらの活動。
- ・子供たちが田の水に足を入れ、川の魚を追い、草原で虫をとるような空間が、信州で少なくなっているのを、そのような場所を提供している。

8. そのままの活動の動機は？

もともと農村の原風景を復元して身近な生き物たちの生息環境を整えたいとの構想をもち候補地もあった。そこで、たまたま飯田市美術館の自然講座で集まった仲間たちの賛同を得て、「野あそびの会」が始まった。主力メンバーの一人は候補地の地主さんのご家族だったので、場所を自由に利用できたのも大きな要因。

9. 将来への希望や目標

今はまだもなみ園だけで生き物の生息環境を復元しているだけだが、伊那谷に沿って同じような空間がつくられて、面的に広がっていけば、生物相が非常に豊かな農村の生態系が復元されるはずである。

10. 悩みや課題などがもしあれば…

もなみ園では20枚以上の棚田が上部に続いているが、実際に手を入れることができたのは下部の3枚程度の田んぼだけで、その保全だけで手がいっぱいになっている。もっと広く環境を整えたい。

11. 調査者からの感想、コメント

「野あそびの会」の結成当初から参加させてもらっているが、里山という概念を実感するための非常によい機会だった。また、気楽に参加できて楽しく、人と自然のつながりだけでなく、人と人とのつながりの大切さも学ばせてもらった。今でも、毎年、もなみ園でのキャンプなどに参加させてもらっている。

当初は博物館の学芸員として参加させてもらったが、博物館が展示ばかりでなく、市民の自然保護活動などをバックアップするという機能を、実体験で学ばせてもらった。

調査担当者（岸元良輔）